

# 文部時報

昭和五十五年三月  
第一二三四号

第九十一回国会(常会)における文部大臣の所信

64

## 特集 諸外国の文教政策

世界の中の日本の教育に期待する…………… E・O・ライシャワー 4

### ▽座談会△

世界の教育と日本…………… 9

(出席者) 木田 宏・クラウス・ルーメル・青木利夫

天野 郁夫・八司会▽鈴木 勲

アメリカ合衆国における中等後教育政策の動向…………… 金子 忠史 27

西欧における雇用と教育政策の問題…………… 潮木 守一 33

### ▽解説△

諸外国の教育行財政制度…………… 大臣官房調査統計課 43

アメリカ合衆国 43 / イギリス 47 / フランス 50 / 西ドイツ 54 / ソ連 57

### ▽現地ルポ▽

タイ国文部省訪問…………… 竹井 宏 60

### 随想

春を待つ…………… 円地 文子 41

日本における教育計画の概要…………… 大臣官房企画室 85

文化と教育…………… 内村 直也 69

### ◎地域文化施設めぐり◎

神奈川県立野外教育センター…………… 82

### ◎文部省のまじ

学術審議会第四十回総会における

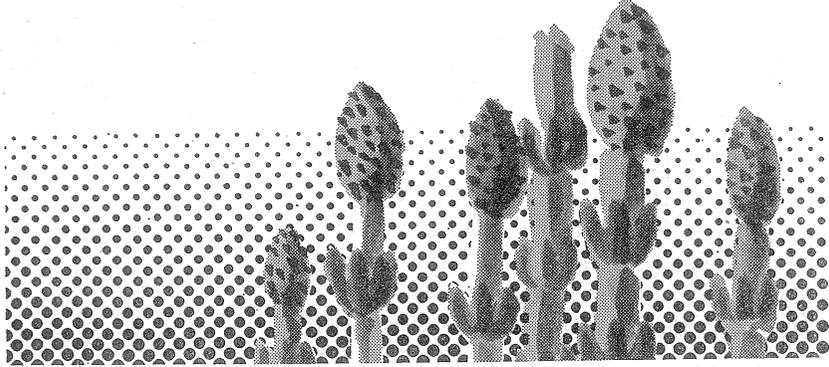
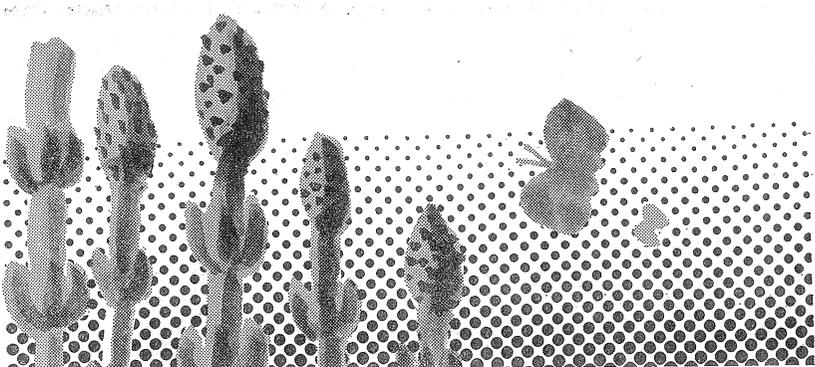
答申建議等について…………… 学術国際局学術課 94

文部時報昭和五十五年度特集テーマ  
(予定)…………… 81

文化財 ● 木造愛染明王坐像  
(三宅久雄)

絵画 ● 安田敦彦 日 食  
(岩崎吉一)

表紙 赤羽根秀一  
カット 内部 敬生



# 文化と教育

中央教育審議会委員  
劇作家

内村直也

## 教育の普及と文化

「文化と教育」という題のもとでは、あらゆるものが含まれますから、何でも話ができます。私の個人的な意見でいいというご依頼ですので、自由な話をさせていただきます。文化ということ、これは難しく考えれば難しいのですけれど、易しく考えれば易しいのでありまして、よく日本には教育はあるけれども文化はないといわれます。これは外国人がよくいうことです。

私も外国に行ったことがありますので知っていますが、日

本のように教育が普及している国はありません。皆さんご承知のように、アメリカでも文盲がかなりおりますし、また他の地域には教育というものが全然ないところがたくさんあります。日本はそういうことがなく、義務教育が徹底的に普及しています。これは文部省の力です。

文化も文部省の所轄範囲なのでしようが、どうも文化は普及していない。教育はあるけれども文化はないということとです。ことに地域の文化——地方文化という言葉がありますけれども、私は地方文化という言葉は嫌いです。地方というと、中央に対する地方ということになります。そういうこともあって、さきの中央教育審議会の「地域社会と文化について」の答申でも、地域という言葉が使用されています。東京も一つの地域に違いないのです。何か地域の

文化というものに対して、地域の人たちが誇りを持っていないのではないかと思われます。教育は普及して、います。が、地域の文化というものに対して、地元の文化に対して誇りを持っていないということは非常に残念なことです。

これは、日本が西洋の文化に対して一目置いていて、西洋の文化が何でもいいのだ、ことに流行というふうなことは、アメリカでやっているから、フランスでやっているからこうだとかいうふうなウエイトを置いていて、西洋の文化を一つ上に置いているところがある。これと同じように中央と地方——私の嫌いな地方という言葉を使いますけれども——の関係でも、地方の文化も、東京でやっているからこうだというふうなところがあると思えます。

そういう点で、教育はあるけれども、徹底しているけれども、文化はないというのは当たっていると思えます。それぞれの土地の人が、それぞれの文化の伝統とか現在の文化に対して、もっと誇りを持っていいのではないか、私の結論としてはそういうところへ行くのです。

その前に、文化というのは一体何だろうと思わしていろいろ考えると、いろんな解釈ができるのです。非常に広い意味で解釈すれば、人間が自然、ネイチャーに働きかけながら、自然状態を脱して形成されてきた物質的、精神的な成果のいっさいをいう。文化の解釈はそれで私は正しい

と思えます。自然状態から脱する、この脱し方なのですけれど、西洋の文化と日本の文化を比較して考えますと、西洋の文化は、単純に割り切って言いますと、石の文化ですね。ギリシャへいらした方はご存じでしょうけれども、アテネのアクロポリスの丘の上にパルテノン神殿があります。

パルテノン神殿は紀元前五世紀に、あの山にえちちらおつちらと大理石を運んで——あの山でも大理石が出たのかもわかりませぬけれど——石の文化を築いた。西洋の文化は、明らかに伝統的に石の文化だといえるわけですね。

石の文化というものを考えますと、人間が自然を征服して——先ほど自然へ何らかの働きかけを行ってということがありましたけれど——人間中心の文化を築いていったのが西洋の文化の伝統になると思えます。

それに反して、日本は島国で隣の國との接触がないことから、自然を征服する力もなかったということもあつたでしょう。しかし日本人の性格からいっても、自然を征服するなんていうおこがましいことは考えなかつた。そして日本人が何をやったかといえますと、自然と融合しながら人間の文化を徐々に築いていった。自然と一緒になつて築いていった。私は、ここに西洋の文化と日本の文化の非常に大きな、根源的な、伝統的な違いがあると解釈します。

今は違います。現在の日本は、むしろ西洋よりも自然を

破壊しているかもしれません。日本の伝統というものの中には、自然を大事にして、要するに自然にも人間と同じような魂があるんだと、草にも木にも魂があるんだと考えたわけです。人間と平等に見たわけです。ですから自然に対して敬語を使うでしょう。お月さまとか、おてんとうさまとか、そういうものに対して敬語を使うこと。それから仏教の思想ですけれども、草や木が枯れて死んでしまうと成仏するのだと。人間も仏になるのだけれども、草や木も成仏するという思想。これは謡曲にある言葉です。

当時の日本人は、紀元前五世紀ごろギリシャで石の立派なパルテノンの神殿が造られたころの日本人は、たて穴を掘って、そこで一族が動物と同じように生活していたのでしょう。そして天気になれば外へ出て行く、雨が降ればじっとそのたて穴の中にもっていた。西洋ではパルテノン神殿のような立派な建物を建てた時代に、日本人はまだそういうことをやっていたわけです。

これを学問的にはアニミズムといえます。アニミズムというのは、動物、植物を人間と平等に見る思想ですね。これが日本の文化の発祥といえますか、もとはそういうことだったといえると思えます。それが日本人の文化の伝統だと思えます。

### 木の文化、無常美

今は違います。今朝も琵琶湖を見てきましたけれど、琵琶湖は汚れています。自然と協調しながらではなくて、西洋人以上に自然を破壊しています。琵琶湖だけではなくて、どこの湖もみな汚れています。地方を旅行すると、洗剤を流すからかもしれませぬけれど、湖は汚れている。現在の日本は、伝統に反して自然を征服するというか、自然を破壊しているところがあつて残念です。ただ、今朝石山寺へ行きましたけれど、やはりいいと思えます。木の伝統がそのまま残っている。石山寺ですから石があるのですが、石の間に木の社殿を建てて、日本人の信仰がそこに表現されている。これは立派な木の文化です。

そこで、木の文化と石の文化との違いは、西洋とは非常に違ったものとして日本人の考え方の中に残ってきています。例えば十世紀の『蜻蛉日記』——『源氏物語』の少し前です——は、藤原道綱の母の著ということになってます。これは作者の名前は出さない、ただの日記です。

この『蜻蛉日記』の著者の夫家兼は、お公家さんで偉い

人だった。奥さんが数人いたので、「今日うちの主人は帰ってくるかと思って待っている。ご馳走を用意したけれど今日も帰ってこなかった」ということが、綿々と十年くらいにわたって書いてあります。そして、人生は何とはかなくいものであろうかということをやっているのですね。ところが、その間に二年か三年日記を書いていない時期があります。それから後になると、突如として「はかなきことは美しきかな」というものの考え方になってくるのです。

これは、日本の思想の非常に大きな特性の一つです。はかなきことは美しきかな、これは木の文化からきていると思われまふ。木は枯れるときがくる、朽ちるときがくる、そういう状態が必ずくる。石の文化のように永遠を目指していません。枯れるときがくる、朽ちるときがくるからこそ次のものが出てきて、非常にいいことになるのだということですよ。

これをもっとはつきり言ったのは、十五世紀になってからの世阿弥です。「散る花があるから、咲く花が美しい」と、そういうことを言った。造花のようにいつも咲き続けているなら、花なんてはこりが積るだけで少しも美しくないではないか。花は散るからこそ、咲いている花が美しいのだという事です。

ここから無常観という日本人の考え方が出ます。つねな

ていること。これはある程度仕方がないと思うのです。

日本の文化は、厳密にいうと模倣文化です。外国の文化を模倣して作った文化で、散る花があるから咲く花が美しいということ、はかなきことは美しきかなというような状態ではなかなか文化は進歩しません。そこで、ある時代には朝鮮から、あるいは中国からいろいろな文化を受け入れてきた。そして、今はアメリカとかヨーロッパから新しい文化をどんどん入れていく。非常に積極的に入れている。その輸入文化の消化、日本の活用に日本人は非常に巧みだったと思います。最近では自動車とかカメラ、これらは日本の文化ではなく西洋人が考え出したものです。それが今や世界の国々、例えばアメリカのような国が、日本の車があまり出まわり過ぎて困るといふくらいに世界中に普及されています。西洋の発明したものを日本人が消化して、より安くて、優れたものを製造しているからです。

この点では、昔の伝統からいっても、例えば日光の東照宮ですが、日本の建物として非常に優秀だといわれておりますが、もとは朝鮮から入ってきた建造物の模倣です。朝鮮に行くともっと古いものがあります。それをその当時日本人が輸入して、日本的にうまく消化して東照宮を造り出したということになるのではないのでしょうか。自動車産業とかカメラ産業のように、東照宮は輸出しませんけれど：

らざるもの美、無常美観、これは西洋にはないもの考え方です。西洋の文化は石の文化ですから、永遠を目指しているわけでしょう。ところが、日本の文化はそうではない。木の文化だからはかない。枯れるとき、朽ちるときがくる。その無常、つねならざるもの、それを美と見たわけです。これは、日本の文化の伝統の中で非常にすぐれた要素だと思えます。無常美は、日本の文化的な思想の大きな要素です。

芭蕉がいったわびとかさびも、一種の無常美です。無常美は、形からするとあきらめの精神も入っておりますけれど、しかしそれが世の中の移り変わりという点からすると散る花があるから咲く花が美しいという思想になっていくわけですよ。

### 文化の移入・消化

そういうことで、日本の文化には立派なものな考え方があるのですが、しかし今の状態を考えますと、西洋の文化に対して劣等感を持っていることですね。西洋文化に迫って行かなければいけない、そういうところが大きく残っ

。日本人はとも文化の獨創性がないといわれます。私も残念ながらそうだと思います。

反面、いい面をいうと、西洋の文化を日本的にうまく消化する点で、日本は文化的に現在の世界の市場を獲得していることになるのです。その根源は模倣から始まっているということですよ。ですから、日本には文化がないといわれますが、考え方によっては、模倣から始まって消化することもまた、一つの文化だといえると思えます。

### 文化と風土・風習

そこで、西洋の文化と日本の文化を比較する場合、いろいろありますが、西洋文化は、やはり気候風土からできている面があります。石の文化と同時に、気候風土から日常生活とか習慣とかいうものができています。例えば西洋では握手する。あるいは抱擁するとか接吻するとかいう風習がある。これは親愛の情を表わすと同時に、例えば握手をするのは手に凶器を持っていないことを示すためだといわれます。日本にはそういう習慣は全然なかったわけ、明治維新以後にやっと西洋から入ってきたのですけれど、

ども、なぜそういう習慣がなかったか。藤原咲平さんという気象学の大家は、日本は湿度が高い国だからそういう習慣がなかったのだといわれています。私、その本を読みましたとき、なるほどなと思いました。

人間は愛情を表現するとき、男でも女でも接近したくないのですが、それを接近しなかった。握手も抱擁も何もなかったというのは湿度が高いからだというわけです。私など汗っかきなものですから、人と握手する前にはポケットの中でハンカチで手をふいて、それから握手をします。そういうしないと、汗が向こうへ移りそうで気がひけます。こういう風習は、確かに気候風土が大きな要素となっていてきているということだと思います。

衣食住の形とか、あるいは信仰とか、道徳とか、法律とか、芸術とか、そういうものも結局その国々の気候風土とか、そういうものからできているのだということです。

日本人の伝統的な文化は、先ほどの無常観という思想と同時に、もっと日常生活の面においては、例えば西洋では部屋に鍵をかけますが、日本人は鍵を使わなかった。若夫婦が泊っているときでも、鍵をかけなくても大丈夫だというのは、日本人の伝統の中に「察し」と「思いやり」があるからです。「察し」と「思いやり」があれば、鍵などなくても若夫婦が安心して夜をあかすことができるのです。

そういう風習は世界の国々にあって、その伝統が今日の文化になっているわけですけれども、日本は文化的にいろいろと世界のものを取り入れて、日本的に消化しているのです。

### 地域の文化に誇りを

そこで、西洋と日本の文化の関係だけではなくて、今度地域の文化の問題ですが、これは「地域社会と文化」という中央教育審議会の答申にもあるのですけれども、私は地域の文化に対してもっと誇りを持たなくてはいけないと思います。今までは何でも中央のものがいい、中央がこうしているからと追従することに全力を注いできたのですけれども、これからは地域の伝統文化に誇りを持って、地域の生活を豊かにしていくことを考える必要があると思います。

徳川時代は各藩の交流を許さないで、すべてが中央と直結という政治をとっておりました。この方法は弊害もありましたけれども、いい点もあったと思います。例えば国内を旅行しておりますと、駅が変わると売店の土産物が違っ

ています。こんなに地域地域の物産の特色のある国は世界で他にありません。アメリカを旅行しても、西部から東部へ行っても土産物にするようなものはそれほど違いがないでしょう。カリフォルニアへ行っても、それからワシントンへ行き、ニューヨークへ行ったらそんなに違いがない。

ところが日本は、徳川時代には藩と藩の交流を許さなかった。そこで、独自のものを考えざるを得なくなった。それを中央に貢ぎ物としたのです。それが今日の各地域の特産品を作り出したということです。

人々は、もちろんそれを誇りにしていたと思いますけれども、こういう点が日本の地域文化にはまだ残っているという点、これは非常にいいことで、これからもこういうものは残して、助長していくことが文化政策として必要だと思います。

### 日本語の特徴

言葉のことを考えてみたいと思います。西洋の言葉と日本の言葉を比較して考えますと、西洋の言葉は論理的ですが、日本の言葉はそうではありません。西洋の言葉と比較

すると非常に論理的でない面がある。しかし反面、日本の言葉には含みというものがあって、日本語には独特の良さがあると考えられます。

それと同時に、中央のいわゆる標準語といわれる言葉に対して、地方の方言の良さがあると思います。

例えば西洋の言葉と日本の言葉を比較しますと、いろいろな例が出てくるのですけれども、コップが机の上にあるという表現、ところが机の空間を置いた上という、この表現が日本語にない。私はずいぶん調べました。英語ですとオン・ザ・テーブルとアバー・ザ・テーブルです。フランス語ですとシュール・ラ・ターブルに対してオードシュールという言葉があります。ドイツ語だとニューバーという言葉があります。「ドイツランド・ドイツランド・ニューバー・アールス」、すべてのものを超えた上にドイツという国があるのだということです。日本語にはこれがありません。

幼稚園の先生が、明日は遠足なので「この記章をポケットの上につけていらっしゃい」といったそうです。そうしましたら翌日、ポケットそのものに着けてきた子どもが半分、それからポケットの上方に着けた子どもが半分ということだったそうです。先生はどっちを考えたのかわかりませんが、「ポケットの上」という表現、これは論理的ではないですね。論理的な言葉が日本語にないのです。

これは日本語の欠陥で、こういう欠けている言葉を日本語の中へ加えていかななくてはなりません。これと同じように、「先」という言葉もそうです。新幹線で、先のほうに故障がありましてどうのこうのとアナウンスしていることがありますが、先のほうというのは機関車の先の部分なのか、線路の先に故障があるのか、聞いていると分かりません。車の前方なのか、車自体なのか分かりません。青と緑も論理的じゃありません。青信号ということをよくいますが、日本語を勉強している外人は、青はブルー、緑はグリーンだと教えられます。ある外人が——これは冗談ではなくて本当の話ですけども——横断歩道で、青信号が出るまでお待ち下さいといわれたというのです。だから待っていたけれど、遂にブルー信号は出なかったというのです。青はブルーだと思ひ込んでいます。グリーンしか出なかったということです。

「上」にも同じような話があります。日本人で英語が少しできる人が、寝台車へ入っていった。上段と下段があり、自分の切符は上段だったそうです。下段に外国のご婦人が坐っていた。その人は何か挨拶をしなければいけないと思ひ、「メイ・アイ・スリープ・オン・ユー」といってそのご婦人を驚かせたという話を聞いたことがあります。どこの国の言葉にもそれぞれ長所と欠陥があります。エ

スペラント語というのがあります、これによって世界の言葉は一つになるという事で、私は学生時代にある人からずい分たき込まれ、一生懸命やったものです。これは論理的にできています。論理一点張りです。しかし、こういう言葉は広く使われません。結局、エスペラント語は、今はなくなってしまうたこととす。言葉はその国の土地、その国の一つの特性を表わしているということになると思ひます。

日本語の中で非常にいいと思ひのは「枯れ葉」なんていう言葉です。イブ・モンタンのシャンソンで、「枯れ葉」という歌が日本でも流行しましたけれども、これはフランス語の原題では「死んだ葉」(フォイエ・モルト)です。英語でも枯れるという言葉はありますが、枯れ葉となると死んだものと解釈するようです。デッド・リーフです。日本語の枯れ葉は、生の余じんを保ちながら枯れているわけでしょう。はかなきことは美しきかなの思想と同じですよ。

それから「心中」という言葉。心の中と書いて心中。その意味を考えますと、どうして心の中なのだろうと思ひます。近松門左衛門の『曾根崎心中』を英語で紹介するとき、「心中」をどう訳そうかと考えました。英語ではダブル・サイド。論理的にいえば、二人が自殺するから自殺のダブルということになります。これをラブ・サイド

ド(愛の自殺)と擬ればそういう訳になるのですけれども、「心中」というのはいい言葉です。心の中、「中」というのは「あたる」ということです。「百発百中」でしょう。

心と心がびったりあたるのは心中する状態だと、そういうロマンチックなところから出ているのです。心中なんていうことはあまりよくないけれども、「心中」という言葉自体は、私はなかなかいいと思ひます。

そういうように、日本語にあって西洋の言葉にない言葉、例えば「奥ゆかしい」なんていう言葉は西洋にはありません。訳せません。

### 標準語と方言

これと同様に、いわゆる方言といわれている地方の言葉にも、私はいいい言葉がたくさんあると思ひます。これも文化です。私は標準語という言葉が好きではありません。標準語が制度化されたのは明治三十五年だそうですが、そのときは日本全国の方言、その当時東京も標準語がなくて方言だったわけですから、日本全国の方言の最大公約数をもって標準語となすという思想だったのです。それが中央集権の力

で、いつの間にか東京の山の手の中産階級の日常生活の言葉が標準語となってしまったのです。

明治三十五年当時の東京の山の手の住民はどういう人たちが考えてみますと、歴史を振り返りますと、徳川慶喜が江戸城を開け渡して駿府に落ちのびたあと東京の山の手に入ってきたのはどういう人たちかというところ、薩長の軍勢が入ってきて、明治の初めに山の手の人種になった。勝海舟のように江戸に居残った人もいて、薩長の人たちが入ってきて、渾然一体となって東京の山の手の住人となり、その言葉となった。だから鹿児島弁とか山口弁というものが東京の標準語の中にはかなり入っています。東京の下町の言葉は伝統的ですが、山の手の言葉は純粹ではありません。

イギリスが植民地をたくさん持っていたときは、いったい誰の話す言葉がスタンダード・イングリッシュなのかという事で議論がありました。結局、王室の話す言葉がスタンダードだということで、キングス・イングリッシュと云うことになったのです。

日本では、NHKのアナウンサーが標準語だといわれませんが、あの言葉はアナウンスをしているので、会話ではないでしょう。標準語を話している人はいないのです。

国語学者は、標準語という言葉をやめて共通語という言葉

葉を使います。共通語の中にどんないい言葉を入れていくということ、これは文化の運動としては必要なことだと思います。

私の友達の前田一夫氏が、「がめつい」という言葉を使った。これは大阪弁なんだろうが、今や共通語の中に入れて定着した感があります。いい言葉です。「がめつい」というのは、けちんぼで、貯蓄心が強くてどうのこうのという意味なんでしょうけれども、なにしろ「がめつい」という音が内容に合致しています。言葉は音ですから、がめついと言っただけで何となく「がめつい感じ」がする。これは非常にうまい言葉を使ったと思います。

そういう地方の方言でいい言葉をどんどん入れていくことが、共通語のこれからの文化政策としていいことだと思います。そして新しい共通語を作っていくことが必要と考えます。

例えば東京で、私がうちを出かけるとき、家内や子どもが「行ってらっしゃい」と言います。私の娘のところへ行ったら、娘が孫と一緒に、元気に「パパ行ってらっしゃい」と言っているのです。それで私は、娘にあとで「おまえ、ああいいう方をしちゃあだめだ。行ってらっしゃい」というのは、どこへ行ってもいいよという意味になるぞ」と言ってやりました。本当は「行ってらっしゃい」と

てらった」というなかなかおもしろい言葉があります。

こういう言葉をうまく共通語に入れていく。言葉は豊富であるほうがいいのですから、地方の方々が、方言劣等感なんてお考えにならないほうがよいと思います。昔、標準語ができたときに、地方の方言を全部撲滅するなんて時の為政者は言ったのですけれども、それはまったく愚の骨頂でありまして、方言に対して誇りを持って、これを土地の言葉であると同時に、いいものは国の共通語の中に入れていくということがどんどん行われるといいと思います。

大阪の人は「もうかりまっか」というあいさつをしますが、私などそのまま解釈してしまつて、「きききするんですかね。もうけなくてはいけないような気になります。「もうかりまっか」に対して「あきまへん」と返事をするのが大阪の方の普通の会話だそうですけど、こういう言葉はその土地だけに残しておいて、共通語の中にはちょっと入れにくい言葉だと思えます。

中央教育審議会の「地域社会と文化について」の答申では文化活動圏ということをおこなっています。われわれが作った答申ですけれども、これはなかなかいいのではないかと思います。今までは県単位とか、市単位で文化が考えられたのですが、文化活動圏というのは、文化生活の圏域が行政区画にまたがっているような人がいるのですから、そ

いう言葉は含みがあつて、男は外へ出れば七人の敵がいる。道路を渡ればどうのこうのということ、**「気をつけて」**という含みを持つて**「行ってらっしゃい」**ということ、**「投げやりに」**行ってらっしゃい、**「なんていったら、どこへ行っちゃかわからない。」**

大阪弁ですか京都弁ですか知りませんが、「早うお帰りやす」という言葉、あれをいわれると早く帰りたいような気がします。「お帰りやす」という語尾がいいんで、暖かくて柔らかい。「行ってらっしゃい」をああいいう言葉に替えたいいものですね。

それから東北へ行きますと、夜のあいさつに「おぼんで」とか「おぼんでやす」とかいいいます。あれもいい。雪のしんしんと降っている晩に、格子戸を開けて「おぼんで」といって人が入ってくる。標準語にすると「こんばんわ」です。コンという音は、狐でも来たような感じがします。音がよくない。言葉は音ですからね。「おぼんで」という柔かいムードの言葉、こういう方言を共通語の中に入れていって、地域の人たちがその言葉を共通語としても使っていくことが地域の文化に対して誇りを持つことになると思うのです。当地（滋賀県）の方言を教えてもらつて非常にうれしいと思つたことがあります。私が発音するとうまくいえないのですが、多少揶揄の意味を含めて「し

ういうことを考える。これが今度の答申の中で一つのポイントになつていないかと思つています。

### 家庭の問題

生涯教育についても、私いろいろ意見がありますけれど、ここでは是非申し上げたいのは、夫婦のあり方について、未熟なことが多いように思われてならないということです。「テレフォン人生相談」というラジオ番組がありまして、私はレギュラーで出ていますが、女の人からの訴えが非常に多いのです。今までは亭主の浮気というのが非常に多かった。それと嫁の立場で姑に対して不平をいう相談が多かったのですが、最近それが非常に変わりました。ここ十年くらいですけど、女性が強くなったのです。最近多いのは何かといますと、夫婦の間に会話がなくなつたというのです。結婚するまでは、ことに恋愛時代とか付き合っているときは、男が一生懸命になつていろんな話題を捜してきて話してくれたけれども、家庭生活に入つたら一年から一年半で会話をしなくなる。この間も新聞に出ておりましたが、離婚の原因に会話がなくなつたというのが多いので

す。男が少しも話をしないというわけです。日本人の夫婦の会話は西洋人と比較すると非常に少ないのです。日本人の会話の平均時間は、ある調査によると一日十四分ということですが、皆さん胸に手をあててご家庭のことをよく考えてください。要するに、結婚して一年半くらいの間にまったく話をしなくなる。家に帰ると「くたびれた、テレビをつけろ」という。朝は急いで「めしだろ」といってかき込んで出かけて行ってしまふ。子どもができれば子どもとは会話があるけれども、夫婦の間の会話はまったくなくないということですが、確かにそういう状態だと思ふのです。

だいたい結婚生活というものは、愛情が続くなんて考えるのが第一に間違いなんですね。フランスの愛の言葉に、「私はあなたを生涯愛します」(ジュ・プ・ゼーム・トート・ラ・ビー)がありますが、フランス人は嘘をいっているようです。生涯愛するなんてことはあり得ないですよ。二十代は情熱です。お互いにああいなあと思ふ。ことに男のほうが女を——あばたもえくぼの時代で——いいなあと思ふ。結婚後一年半というところが危機で、それを乗り越えて十年くらいたつと、だんだん客観的になってきて、あばたもあばたに見えてくる時代になります。この時代には、お互いに寛容の気持を持たなければならぬ。

あと十年、三十代から四十代くらいになると、結婚生活

は忍耐です。じつと我慢しているんです。夫婦生活は忍耐です。忍耐も一つの愛情です。この時代になると、あばたもえくぼではなくて、えくぼでさえあばたに見えるわけですから、そういう時代を通り越して、五十から六十くらいになりますと諦めの時代ですね。諦観、諦めの時代を通り越すことが、やはり夫婦のあり方であって、それを通り越して六十から七十とくると、初めて夫婦というものは完成して、夫婦がお互いに必要欠くべからざるものとなります。夫婦生活の完成というのはそういうものだと思います。

再婚しても、やはり同じ過程を経るのです。同じことです。今までこういうところが嫌だったけれども、今度はそういうところのない女房を選んだという人がいます。それで満足していても、次第に別の嫌なところが出てくる。情熱・寛容・忍耐・諦観の経過が短縮するだけです。死別は別として、できれば皆さん離婚をしないほうがいいです。しても同じことです。

### 学び問う精神

中央教育審議会の小委員会報告で、生涯教育という言葉

が使われていますが、私個人の考えからいえば、学習更には学問という言葉のほうが好きです。学問というところ「こういう学問がある」というように、名詞的に使われます。学問を学びの門と書く人がいますけれど、これは間違いです。学問とは学び問うのです。学び問うという精神、これは人間一生涯持ち続けなければいけないものだと思います。

学び問う精神、死ぬまで人間には分からないことがたくさんあるでしょう。この地球の、宇宙の果ての果ては、どうなっているのか分からない。こういうことはやはり知りたいたいと思う。こういう問いの精神を持ち続けることが絶対に必要で、この問いの精神は、学校時代からできるものではありません。子どものときの、家庭教育の時代から身につけなくてはいけません。私はそう思います。初めの家庭教育において、子どもたちが自分で解決の道を考えるために問う。親から学び、親に問う。あるいは親がわからないときにどこかへ行って調べておいでというようなことで、学び問うという精神を持つことが、人間死ぬまで必要です。生涯教育に対して私の個人的な意見としては、最初が肝心だということです。

本稿は、昭和五十四年度東海・北陸・近畿地区文教施策連絡協議会における講演を基にしたものです。

### 文部時報昭和五十五年度特集テーマ(予定)

- ▽昭和五十五年度文部行政の展望 55年4月号
- ▽短期大学30年の歩み " 5月号
- ▽新しい指導要録/進路指導 " 6月号
- ▽文教における地域社会振興施策 " 7月号
- ▽学校給食の充実 " 8月号
- ▽学級編制と教職員定数の改善 " 9月号
- ▽教育費の分析 " 10月号
- ▽伝統文化の継承と発展 " 11月号
- ▽国際化の進展と邦人子女の教育 " 12月号
- ▽我が国の教育水準 56年1月号
- ▽青少年のための社会教育施設 " 2月号
- ▽私立学校教育 " 3月号

#### ※購読御希望の方へ

本誌を御購読されようとする方は、ハガキに、住所・氏名・送付部数(何月号からかを明記)を記入の上、左記へお申込みください。ハガキには必ず「文部時報申込」と明記してください。

申込先 〒162 東京都新宿区東五軒町五二

(株)ぎょうせい 営業課

(年間購読申込みの場合送料は発行所負担となりますが、一部のみ購読の場合は、送料は申込者の負担となります。)

安田 毅彦 日 食

中国周時代の幽王（紀元前八世紀）は、王妃褒姒を溺愛するあまりさまざまな愚行を重ねて諸侯の不信をかい、ついに夷狄に滅ぼされた暗君であった。この絵は幽王の一代記である「幽王愚行伝」に題材を得ている。ある日、日食のために、にわかには太陽が欠けはじめたのを見て褒姒が恐しさのあまり気を失ない、幽王は側近とともに介抱に大わらわという場面であるが、昔から日食は凶事の前兆として知らわれていたため、作者は愚昧な幽王の未路と考え合わせて、この画題を選んだという。

もともと毅彦は顧愷之の「女史箴図巻」の研究を熱心に行っており、その時の感動が制作の動機となっているのだが、中国古代絵画の繊細な線に学びながら、毅彦独自の柔軟でしかも強靱さをしめた描線と温雅で澄んだ賦彩によって、説明的になりやすい画面に見事な緊迫感を与えている。第一二回院展に出品された。

（岩崎吉一）

編集後記

▽春一番も過ぎ、柔らかな春の陽差しが、一際まぶしく感じられます。三月は年度末で、何かと忙しい季節ですが、山と積まれた書類の整理に悪戦苦闘している人も少なくないと思います。

▽本誌 月号で企画した「これからの教育」は、大変好評でした。今月は、いわばその第二弾として、一九八〇年代の文教政策を考えていく上での参考として、「諸外国の文教政策」を特集テーマに取り上げました。

▽巻頭論文をご執筆いただきましたライシャワー氏は、駐日大使として長い間日本で活躍され、我が国の教育事情にも非常に明るい方ですが、ご多忙中にもかかわらず、今回の企画を快くお引受けいただきましたことは、文部省の広報誌としての伝統ある「文部時報」の価値を高く評価されたことと、大変うれしく思います。原文は、英文でしたためられておりますが、在米日本大使館の和田浩司氏にそれを翻訳していただきました。和田氏には、ライシャワー氏との交渉に当たり仲介の労を取っていただくなど、一方ならぬお世話になりました。心から御礼申し上げます。

▽来月号は、予算を中心に「昭和五十五年度文教行政の展望」を特集します。

MEJ 61 月刊 「文部時報」 3月号 第1234号

著作権  
所有

文 部 省

昭和55年3月5日 印刷  
昭和55年3月10日 発行

発行所 株式会社ぎょうせい  
本社 東京都中央区銀座7丁目4番12号  
(郵便番号 104)  
(営業所) 東京都新宿区西五軒町52番地  
(郵便番号 162)  
電話 東京 (268) 2141 (代表)  
振替口座 東京 9-161番  
印刷所 株式会社 行政学会印刷所

定価 200円 (〒33円)  
年間購読料 2400円 (〒共)

・ただし、増大号、臨時号の場合は別に代金を申し受けます  
・なお、購読の申し込みは直接営業所またはよりの書店をお願いします